

日本労働年鑑 第57集 1987年版
The Labour Year Book of Japan 1987

第四部 労働組合と政治・社会運動

III 政党の動向

2 選挙

2 第一四回参議院議員選挙

概況

第一四回参議院通常選挙は六月一八日に公示、総選挙と同じ七月六日に投票された。選挙の党派別当選者数は第85表のとおりであり、得票数と得票率は第86表のとおりである。

今回の参院選は、二度目の衆参同日選であり、中曽根内閣のもとでの八三年六月参院選に次ぐ二度目の選挙となった。また、前回の参院選で全国区にかわって新たに導入された比例代表区の実験も、今回で二度目ということになる。選挙の争点は、衆院選と同様であり、各党の選挙結果もほぼ総選挙と同様の傾向を示しているが、比例区だけは少し異なった動向を見せている。

なお、参院選の投票率は、選挙区七一・三六%(前回八三年は五七・〇〇%)、比例代表区七一・三二%(同)であった。

自民圧勝

自民党は、衆院選とともに参院選でも圧勝した。自民党の議席は、比例区で前回より三増、前々回より一増の二二議席、選挙区でもそれぞれ一増、二増の五〇議席、合計で、四議席増の七二議席であった。この比例区当選者数は、過去の全国区を含めて二番目の成績であり、選挙区の当選者数は地方区を含めて第一位、合計の議席数も過去最高であった。得票数は、比例区が過去三番目だが、選挙区は過去最高となった。しかし、得票率では選挙区の相対得票率を除いて、いずれも八〇年六月選挙に及ばなかった。参院選では、全体として自民党は比例区よりも選挙区で健闘したといえる。

野党の不振

衆院選と同様、野党は参院選でも敗北した。社会党は、比例区が九人当選で過去二回と同数、選挙区が一人当選で過去二回より二議席減、合計二〇議席で過去二回の選挙より二議席減となった。公明党は、比例区が七人当選で前回より一減、前々回より二減、選挙区が三人当選で前回より三減、前々回と同数、合計一〇議席で前回より四減、前々回より二減となっている。民社党は、比例区が三人当選で過去六回より一減、選挙区が二人当選で過去三回と同数、合計五議席で過去三回より一議席減であった。

共産の健闘

野党各党が軒並み議席を減らすなかで、唯一議席増を果たしたのは共産党である。共産党は、比

例区が五人当選で前回と同数、前々回より二増、選挙区が四人当選で前回より二増、前々回と同数、合計九議席で過去二回より二議席増であった。比例区の得票数も初めて五〇〇万票台を超え、過去最高の得票となった。

ミニ政党

前回参院への比例区導入にあたって話題をまいた「ミニ政党」は、比例区で前回一二、今回二一政党が名乗りをあげ、そのうち今回の選挙で議席を得たのは、税金党・サラリーマン新党・二院クラブの三党であり、各一議席ずつという結果であった。選挙区では、前回野末陳平を当選させた税金党が東京選挙区に今回も候補者をたてたが当選にはいならず、ミニ政党からの当選者はなかった。無所属では、大阪選挙区で漫才の西川きよしが立候補し、一〇二万票という大量得票で注目された。

各党の選挙総括

八六年七月の衆参同日選挙についての各党の選挙総括としては、つぎのようなものがある。

- (1) 自民党—本誌編集部「結党以来の大勝利」『月刊自由民主』八六年八月号。
- (2) 社会党—日本社会党中央執行委員会「衆・参同日選挙の中間総括」『社会新報』八六年八月五日付(「特集86選挙—分析と中間総括」『月刊社会党』八六年九月号に収録)。
- (3) 公明党—「六一年 衆参同日選挙の結果分析」『公明新聞』八六年七月一日付二二日付(一部分は「特集 同日選結果と野党の対応」『公明』八六年九月号に収録)。
- (4) 民社党—民社党第二二回中央委員会「衆・参同日選挙総括」『週刊民社』八六年一〇月一〇日付。
- (5) 共産党—日本共産党第四回中央委員会総会「幹部会報告」、「党務報告」、「決議」『第四回中央委員会総会決定集』(「決議」は『赤旗』八六年八月一日付にも掲載)。

日本労働年鑑 第57集 1987年版

発行 1987年6月25日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年8月1日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1987年版(第57集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
